

第20回「チーム新・湯治」セミナー [東京現地会場+オンライン配信]

ONSEN・ガストロノミーツーリズムを通じた温泉地のさらなる磨き上げ

環境省では、第20回「チーム新・湯治」セミナーを令和7年7月29日に開催しました。ガストロノミーツーリズムは、その土地の気候風土が生んだ食材・習慣・伝統・歴史などによって育まれた食を楽しみ、その土地の食文化に触れることを目的とした旅の楽しみ方で、欧米を中心に世界各国で取り組まれています。今日、観光の多様化が進む中、日本が誇る「温泉」と、温泉地が持つ「食」「自然」「文化・歴史」等を掛け合わせた「ONSEN・ガストロノミーツーリズム」の取組が始まりもうじき10年を迎えます。本セミナーでは、日本の温泉地の魅力を広く発信するONSEN・ガストロノミーツーリズムに取り組んできた講師からの発表や意見交換を通じて、温泉地におけるウェルビーイング、地域資源のさらなる磨き上げによる新たな価値の創出について、チーム員の皆さんと一緒に考えました。

講演 ONSEN・ガストロノミーツーリズムの歩み～国民保養温泉地と共に～ 小川正人 氏（一般社団法人ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構 理事長）

- 小川氏は、ANA総合研究所での勤務経験から、日本にはたくさんの温泉地があり、それぞれの地域に食・自然など様々な魅力があふれていることに着目し、フランス・アルザスの「ガストロノミーウォーキング」に着想を得て、日本版のONSEN・ガストロノミーツーリズムによって、地域の魅力を活かした観光振興を実施してきた。
- アルザスではワイン街道を整備し、6～9月の毎週末にガストロノミーウォーキングを開催している。人口300万人弱の地域に年間3,000万人近くの観光客が訪れ、また特産のアルザスワインは、約6割が直売されるなど、多くの経済効果をもたらしている。
- 2016年10月5日、ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構を立ち上げた。同機構は、ウォーキングコースの認定やHP、SNSなどを用いた情報発信、海外との提携などを行い、各地の主催者をサポートしている。モデルケースとしては、3,000円～5,000円程度の参加費で、8km前後のウォーキングコースを巡りながら、その土地ならではの食材やお酒を楽しみ、終了後に温泉に浸かるという内容。地域の特性に合わせて開催することが出来る。
- これまでにONSEN・ガストロノミーウォーキングは全国で200回以上開催しており、参加人数は延べ3万人超。イベント満足度は95%と非常に高く、地元の方や参加者同士の交流によって、魅力が伝わるだけでなく、リピーターや新たな来訪者を増やすきっかけになっている。参加者の属性として、男女比は4：6。年代は、40～50代が中心で子供連れの方も多し。また、参加者の居住地は約半数が県外となっている。
- 将来的には長期滞在型プランにも取り組んで行きたいと考えており、参加者だけでなく、地元の方の一体感が醸成され、全員が笑顔になれる取組を進めている。



発表1 新湯治で活性化 ～絶景も名物もないけれど…西の横綱俵山温泉オンガス10年を検証～ 藤永義彦 氏（株式会社SD-WORLD 代表取締役）

- 俵山温泉は、山口県長門市俵山に位置する昭和レトロな温泉地。還元力が強い泉質のアルカリ性単純温泉で、各旅館にお風呂はなく、宿泊客は浴衣を着て地区内に2箇所ある公衆浴場に入るという外湯文化が根付いている。1955年に国民保養温泉地として指定された。
- かつては湯治場として栄え、最大で45件ほどあった旅館も現在は17軒まで減少。入湯客数もピーク時には70万人に達したが、右肩下がりに減少し、昨年は11万人。藤永氏は、「温泉街に賑わいを取り戻したい」との想いで株式会社SD-WORLDを設立し、温泉街の活性化に向け取り組んでいる。
- 主な取組として、2017年からONSEN・ガストロノミーウォーキングを実施している。取組をはじめた理由は、俵山温泉は国民保養温泉地として温泉の泉質や自然環境、施設などが充実しており、温泉地の地域資源を歩いて体験する「ONSEN・ガストロノミーウォーキング」との相乗効果が得られると考えたためである。1年目から春と秋で2回開催し、今では全国一の開催数（9回）を誇っている。
- コースの内容としては、約10キロのコースを3～4時間かけて歩いてもらい、その間に7カ所程度のポイントを設け、周辺の自然や食などを楽しんでいただくというもの。地元で採れた食材を使用したおでんや山口県の美味しいお酒が味わえる他、柑橘の収穫体験や竹林の中でのヨガ体験等が楽しめる。
- アンケートでは毎回約95%という高い満足度が得られた他、特に地元の人々との交流が評価されており、これが俵山のONSEN・ガストロノミーウォーキングの特徴である。俵山地区の10人に1人がイベントの運営に参加しており、地域の活性化にも貢献している。



発表2 火山と共存している雲仙でONSENガストロノミー 荒木正和 氏（一般社団法人雲仙観光局地域営業部 部長）

- 雲仙市は、長崎県島原半島の入り口に位置しており、普賢岳や雲仙地獄といった雄大な自然環境を有している。日本で最初の国立公園に指定され、雲仙温泉と小浜温泉という泉質の異なる温泉を有する温泉地でもある。
- 雲仙観光局では「インテグレーション全体計画」を作成して、特定の地域や施設で来訪者に持ち帰ってほしい価値や意味を文章化しており、雲仙温泉では「自然」「食」「歴史」「温泉」の4つの軸でユニークな価値を伝えることを目的としている。
- これら4つの軸を全て体験できる事業として、ONSEN・ガストロノミーウォーキングの開催に力を入れている。雲仙では過去5回開催しており、全ての回で高い満足度を得ているが、雨天での開催時にコースを室内に変更したが、雨でも外を歩いて景色を見たかったという意見もあった。
- その他、雲仙での開催翌日に小浜温泉でも開催したということもあったが、半数以上の方がどちらにも参加するなど、こうした開催方法もありだと感じた。
- コース内には、自然や景色を楽しむことができるポイントをちりばめ、そこで食事も提供することで参加者から好評を得ている。提供する食としては、雲仙チーズの盛り合わせや雲仙地鶏の温泉たまご、地魚にぎり、地酒など地元雲仙市産の食材をたっぷり使った料理を提供。
- 企画運営には、スタッフとして地元の大学生などにも協力していただいている。また、環境に配慮し、使い捨ての食器は一切使わず、陶器等の食器を使用している。
- 雲仙観光局では、今後もONSEN・ガストロノミーウォーキングを大切にしていきたいと考えており、自走できる事業作りに向けて取り組んでいる。



発表3 新たな発見と喜び～楽しくてしょうがない～ 織田智富 氏（一般社団法人那須塩原市観光局 代表理事/局長）

- 那須塩原市は、栃木県の最北部に位置するまちで、市内に塩原温泉郷と板室温泉という2つの温泉地を有する。東京駅まで新幹線で約70分と交通利便性に長けており、お隣の那須町と協力して観光誘客に向けて活動している。
- 那須塩原市の観光資源の一つ、塩原温泉郷は6種7色3性質を持つ多彩な温泉地。また、塩原温泉の名物グルメとしては、「スープ入り焼きそば」と「とて焼」が推しであるほか、生乳産出額が全国第2位を誇る「酪農のまち」であることに加え、大企業の工場なども所在している。
- こうした観光資源を活かし、令和2年度からONSEN・ガストロノミーウォーキングの取組をスタートした。初回は、板室温泉とその周辺エリアで開催し、初回にも関わらず外国人を含め、100名が参加した。以降、令和3年度（塩原温泉郷）は102名、4年度（西那須野）は162名（販売開始から5日で完売）、5年度（黒磯）は225名、と参加者は右肩上がりとなった。
- 6年度は再び塩原温泉郷で実施したが、新たな試みとしてテントを使わず、既存の施設と飲食店をガストロポイントとして活用した。これによってスタッフの負担軽減につながったことはもちろん、お店のメニューを食べられたという点で、参加者からも好評であった。
- 那須塩原市のONSEN・ガストロノミーウォーキングの特徴は、市長自らウォーキングに参加する点である。毎年異なるエリアで開催しており、エリアごとに提供する市産食材等も変えている。
- こうした取組には、トップの理解が必要であり、市長が積極的だったことがスタッフのモチベーションアップにもつながった。また、スタッフにも遊び心が必要であり、歴史・文化・食に加えてストーリー性を持たせることで参加者の感動につながり、更にはおもてなしにもつながっていく。



講師発表後の質疑応答、講師を交えた参加者との意見交換

今後の普及について【講演】

- 参加者：今後どの層をターゲットに普及していきたいと考えているか。
- 小川氏：インバウンドの誘客に力を入れていきたい。また、アルザスでは若者の参加者も多く、盛り上がっているので、若年層向けの企画も検討している。それぞれの地域に合った要望を取り入れていきたい。

実行委員会でのやり取りについて【講師を交えた参加者との意見交換】

- 藤永氏：実行委員長に旅館の若大将を据えて、料理などの企画を行っている。また、料理以外のコースなどについては、別の部会が企画を行い、それぞれが協力して進めている。
- 荒木氏：自走に向けて、経費を削減しながらも、満足度を上げるための取組を進めている。
- 織田氏：事務局が企画案を作成し、それに対して、実行委員会が肉付けをしていく。実行委員会には、様々な業種の方にも参画していただいております。こうした事業者の理解や協力の上に成り立っている。

自走化に向けて【講師を交えた参加者との意見交換】

- 藤永氏：自走化に向けて昨年参加費を5000円に値上げしているが、これ以上はなかなか難しい。ただ、5000円でも赤字のため、資金の部分は大きな課題となっている。
- 小川氏：切り詰める満足度が下がるので、地域でスポンサーを取るなど、拡大的なやり方をしないとけない。シテセールスの一環でもあり、温泉地をPRしていく出発点になればよい。ちなみに、参加費が7000円のものもあったが、それでも人は集まっていた。
- 荒木氏：運営側とスポンサーのマッチングイベントがあると良い。備品等劣化しているものもあるので、そういった支援をしていただける企業がいたら、嬉しい。
- 織田氏：企業の方々には、那須塩原市のファンになってもらい、金銭的な面も含めて一緒に活動ができるとありがたい。そのために、我々も那須塩原市をより魅力的な地域にしなければいけないと考えている。